

出演者変更のお知らせ

この度、出演を予定しておりましたカルリス・ブコフスキー氏（ピアノ）は、体調不良のため急遽降板となりました。
楽しみにされていたお客様には心よりお詫び申し上げます。
代役として、片田 愛理氏（ピアノ）が出演いたします。
何卒ご理解のほどよろしくお願いいたします。

片田 愛理 / Airi Katada (Piano)



神奈川県横浜市出身。3歳よりピアノを始める。
東京音楽大学ピアノ演奏家コース・エクセレンスを特別特待生として首席で卒業し、
ウィーン国立音楽大学大学院を最優秀で修了。現在は東京音楽大学でピアノ非常勤講師として勤め、同時に同大学大学院後期博士課程に在籍。

2006年第6回スクリヤービン国際ピアノコンクール(パリ)第1位。
2010年第16回ショパン国際ピアノコンクールに当時日本人最年少で参加、2次審査に進みディプロマを取得。
2013年第5回仙台国際音楽コンクール第5位。
2021年第71回ヴィオッティ国際音楽コンクール最高位(1位なしの2位)併せて特別賞を受賞など国内外での多くのコンクールで受賞。
ショパン国際ピアノコンクールでの演奏を高く評価されパリに招聘、サルコルトーにてリサイタルを行う。
2011年にカワイ表参道パウゼにてデビューリサイタルを開催、NHK-FM「名曲リサイタル」に出演。
また日本・ベトナム外交樹立40周年を記念し「第1回日本・ベトナムピアノフェスティバル」の日本人代表ピアニストに選出され、国内では表参道・横浜・陸前高田の3ヶ所、ベトナムでも4ヶ所でリサイタルを行いその様子がベトナム国営放送に取り上げられる。
小林研一郎、角田鋼亮、Antoni Wit、Roland Baberなど国内外の著名な指揮者と共演。
2013-2015年度ヤマハ音楽振興会音楽支援奨学生。

～プログラム～（変更）

【前半】 モーツァルト：ロンドニ長調 K.485 <ピアノ>

モーツァルト：「ああ、お母さん聞いて」による12の変奏曲 ハ長調 K.265 (K.300e)

18世紀後半、フランスで流行した民謡《Ah, vous dirai-je, maman（ああ、お母さん、聞いて）》をもとに、モーツァルトが1778年に作曲した変奏曲。恋心を打ち明ける少女の気持ちを歌ったこのメロディーは、のちにイギリスで《Twinkle, twinkle, little star》として詩がつけられ、さらに日本では《きらきら星》として広く親しまれている。
そんな馴染み深い旋律に、モーツァルトは12の多彩な変奏を施した。優雅で繊細なものから、軽快でユーモラスなもの、技巧的で華やかなものまで、さまざまな表情を見せてくれる。たった一つの旋律が、こんなにも違った姿で響いていくのは、まさにモーツァルトならではの遊び心と創意のなせるわざといえる。

【後半】 ショパン：ノクターン 変ホ短調 Op.9-2 / リスト：メフィスト・ワルツ第1番 S.514 R.181 <ピアノ>

ショパン：アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 作品22

ショパンが20代半ばの頃に書き上げたこの作品は、彼の華麗なピアニズムと抒情性、そして祖国ポーランドへの想いが詰まった名作として知られている。
もともとは《ポロネーズ》の部分が先に作曲され、その後、《アンダンテ・スピアナート》が前奏として加えられ、現在の2部構成にまとめられた。
曲は「アンダンテ・スピアナート」と「ポロネーズ」の間に切れ目なく続いて演奏されるが、その性格は対照的だ。
冒頭の《アンダンテ・スピアナート》は、静かで幻想的な雰囲気満ちた序奏。
柔らかく揺れる6/8拍子のリズムの中に、ショパンらしい繊細な歌心と装飾的な響きが漂う。まるで夢の中をたゆたうようなこの導入部が、後半の劇的な展開への期待を静かに高めていく。
続く《華麗なる大ポロネーズ》は一転して、輝かしい技巧と華やかさが前面に押し出された音楽。
堂々としたポロネーズのリズムにのせて、力強い跳躍、煌めくパッセージ、そしてショパンならではのリリカルな旋律が次々と現れ、まさに「華麗」という言葉がふさわしい音楽が展開していく。
この作品は、ピアニストとしてのショパンの魅力と、詩人としてのショパンの感性が融合したような構成になっており、演奏会の場においても非常に映える1曲となっている。